

佳作

自然と共に生きる水

徳島県

鳴門教育大学附属中学校 一年 田中 優衣

「雨が降れば山の水は元通りになるけん。雨が降るのを待つとったわ。水はなくてはならない存在じゃ。」

と祖父は言う。私は祖父と一緒に山に入る。冬の間に古い竹を切り日当たりを良くする。私達の地域は正月が過ぎるとタケノコ掘りが始まる。その頃は降雨量が少ない。雨が降らない日が続いたので、軽トラックの荷台にタンクを積み水を入れ山へ運んだ。二人で何往復もして水を撒く。一日中頑張った日は私も腰が痛くなった。地表の腐葉土を握りしめると濡れているように思う。しかしトンガで土を掘ると深くまではなかなか染み込んでいなかった。徒労に終わる日もある。ひとたび雨が降れば長靴の底に充分に水を吸った赤土が重たくまとわりつく。収穫したタケノコは私の腕いっぱいに広がり重い。タケノコは水をたくさん含んでいる。一晩置いておくと新聞紙がびっしりと濡れる。

五月連休を過ぎる頃タケノコは一日ごとに私の手のひらほど生長する。水を吸ったタケノコは背丈が高く色が濃くなり竹筒として出荷する。瓶詰めやメンマ等に加工されるのだ。竹の根は太く地下茎を四方に伸ばしどこまでも巡る。根は水を蓄えて山々を守ってくれる。

この山の中腹には農業用溜池がある。昭和初期に町の干害防止と安定収入策のために作られたそうだ。平成に入り修繕も行われ今も大切にされている。八反ほどありとても広い。一年中薄緑色の水がたつぷりと溜まっている。用水路へ流れ出す「ザーザー」という水の音は私の心を癒やしてくれる。天気が良い日には亀を観察することが出来る。空にはトンビが円を描きながら飛ぶ。木のとっぺんには白サギが留まって遠くを見つめていた。その麓には一面に田畑が広がる景色は美しい。

今回私は母と山を下り歩いた。田には細く小さな苗が植えられていた。アメンボやオタマジャクシも楽しそうに泳いでいた。畑で採れたタマネギの泥を用水路で洗う。母は幼少期から変わらないこの景色が好きだと

言う。イタドリは決まって同じ場所に育つことを教わった。利尿や緩下等の作用がある。炊いて料理にも使う。手で柔らかい茎を折りそのままかじる。酸味のある少し渋い汁があふれる。たくさん水が含まれていることが分かる。湿気が多く日陰に群生する白い花を調べた。トキワツユクサだ。田畑、植物や生き物も全て水が必要だと気が付いた。

さて、平成二十六年版日本の水資源の資料によると一人一日当たり使用水量は、過去二十年間で増加傾向から横ばいになり穏やかな減少傾向であったそうだ。増加要因としては世帯構成員の減少が考えられる。特に高齢者のみや単身世帯が増加している。核家族化が進むことも世帯当たりの使用水量を増加させる。また水洗化率や自家風呂普及率の向上等も原因として考えられるそうだ。減少要因は節水機器の普及や調理済み食品の普及が考えられる。時代に応じた労働形態の変化が影響しているようだ。私は暮らしの中で節水を心掛けている。歯磨きや手を洗う時は蛇口をその都度閉める。毎日使う弁当箱の汚れがひどい時は紙で拭いてから水で洗う。

水は山を元気にして実りを豊かにしてくれる。大切にしなければいけない。この水を守るために私ができることを考えた。一つ、水を汚さないこと。食べたお菓子の包み紙や空き缶は持ち帰る。自転車の不法投棄もあると知った。二つ、維持管理してくれる人に感謝すること。大雨が降ると決壊しないように水栓を緩める。これから夏になると草刈りも大変になる。三つ、私は山に入り、祖父の後を歩み続けること。近年は高齢化や職業の多様化が進み山を管理する人が減っている。溜池の水は枯れない。それは山を守ってくれている人がいるからだ。感謝の気持ちを忘れない。祖父と一緒に山に入ることでは水は自然と共に生きていることが分かった。私はふるさとの大切な水を守り次世代に引き継ぐと決めた。